

新たな一歩

びんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この『力』は何のために

目次

それは新しい旅路の始まり	1
地球へ	9
デバイスと魔導師と	16
魔導師	23

それは新しい旅路の始まり

——『惑星再生委員会』

それはその名の通り、かつてとある星を再生しようと奮起していた集団の名称。今はもう、滅んでしまった過去の名残。

星の滅びを食い止め、再生しようとするその委員会が消滅したことで、その星の滅びは確定した。『死蝕』を食い止めるものはおらず、運命のママに滅ぶことが決まっていた星を、『それでも』と救おうとした者たちがいた。

そして今——

「この土地ももう、私たちが手を加えなくても問題なさそうです」

緑に包まれた丘に一組の男女がいた。そのうちの片方——金の髪の少女、ユーリ・エーベルヴァインはふわりとした笑みを浮かべてこの場にいるもう一人——色素の薄い髪色の少年、ウエル・ハーベストに話しかける。

「うん、そうだな。他のところも確認に行ってみるか？」

ウエルもユーリに笑顔を向ける。彼が視線を向けたところは全て緑に覆われているが、それらがもう自立して手を加えなくても問題ないレベルなのかどうかは行ってみなければわからない。そう思っている発言だったのだが——

「ダメですよ、ウエル。この間もこうして働きすぎて倒れちゃったじゃないですか」

ユーリはむっとした表情でウエルを諫める。ウエルは彼女に弱いのだが、これに関しては譲れない理由がある。

「そうは言われても。俺の両親は——俺はこの星から生まれる前に逃げ出したんだ。そんな俺がおめおめと戻って来たんだから、そのぶん働かないとダメだろ？」

そう、ウエルはこの星から逃げ出した。正確には彼の両親が、彼が生まれる前の母体を気遣って別の星に移ったのだが、それでも本来なら自分が生まれるはずだった星ということ、かねてから興味を持っていたのだ。

そこにちようどよく舞い込んで来たエルトリアの再生の兆しの報。今行くしかないと思い、それと同時に『今更何の面下げて戻って来た』と罵られる覚悟があった。何を言おうとも、彼がこの星から逃げ出し、戻る機会は幾度もあったにもかかわらず、『星が再生する兆しが見えて来た』とわかるまで戻ってこなかったことは事実なのだ。

だが、待っていたのはそんな罵倒ではなく、たった一人ではあったが『人が戻って来た』という事実^に喜ぶフローリアン一家。それを見たことで、ウエルはこの星の再生を心から願っている、自分みたいな裏切り者の帰還を喜んでくれるその一家の力になりたいと思った。

それが大体二年ほど前の話になる。

「ダメです。そんなこととして倒れたら、ウエルの看病もする必要が出て来ますからそっちの方が惑星再生の作業に取りかかれる人員が減って遅くなっちゃいますよ」

「そう言われると……」

頬を掻きながらウエルは困った顔をする。二年もあれば、出会った頃よりも気安い関係性になる。そして、それだけの時間があれば関係性も固定されて、彼自身、彼がどう足掻いても勝ち目のない相手、というものも存在することを理解していた。

例えば、エレノア・フローリアン。ウエルがこの星に戻ってくる前、未だグランツ・フローリアンが病床に臥している時から、フローリアン一家を守り抜いて来た女性。

例えば、^王デИАー^様チエ。今現在のフローリアン一家の家事全般を取りしきるレベルにまで家事スキルが上達した少女。完全に胃袋を掴まれているため、逆らおうという気にすらならない。

例えば、今ウエルの目の前にいるユーリ・エーベルヴァイン。彼女に逆らえない理由は至極単純で、ユーリが悲しそうな表情になるのはフローリアン一家もウエルも苦手だからである。だから、できる限り彼女を悲しませないようにしようとする。あとはユーリがウエルの扱い方をよく理解しているということもあるが。

「さ、一緒に戻りましょう?」

「そこまで言われたらしょうがない、か」

だから、彼女に言われるとその通りに行動してしまう。とはいえ、その行動はウエルのことを思つての発言なので、頭ごなしに否定するわけにもいかない。ウエルは苦笑しながらもユーリの言葉に従い、二人揃つてフローリアン農場に戻つて行く。



「あ、二人ともおかえり〜」

農場に戻つてくると、畑を耕していた青い髪をツインテールにした少女——レヴィがすぐに気がついて声をかけてくる。

「あれ、レヴィだけですか？ この時間ならシュテルもいそうなものですけど……」

「シュテルんは『何か大事な話がある』つて、王様と話し込んでたよ。それより、二人はどうしたの？ 今日是一日、この星の再生つづりを確かめてくるつて言つてたよね？」

「一旦休憩です」

レヴィとユーリは仲良く話をしているが、そこに加わるのはウエルとしては遠慮したい。彼女たちの仲にはどれだけ経つても敵いそうにないとすら思つてしまつていた。

「それにしても、牧場の方からも声がしないな」

「あー、うん。アマタとキリエも大事な話があるらしいし、それなら僕がーつて一人で」

「ユーリ」

「はい」

「え、え？ 二人とも、ちよつと顔が怖いよ？」

レヴィが一人でこの広大な農場の農作業をしているという事実を怒りを見せる二人。しかも周囲を見ると、朝からやつていたとしても普通一人ではできない量の農作業が行われていた。それはつまり、レヴィが全力でやつていたことを示していて、自分の疲労を考えずに作

業していたレヴィへの怒りは強くなる。

「いくらレヴィが強いからって無茶はしちやダメだろ」

「風邪引いたり怪我したりする方がダメなんですよ」

「はーい……」

そんな話をしていた三人の元に、家の方から一人の少女がやってくる。

「おや、ユーリ、ウエル。今日は随分早かったですね」

「シユテル。はい、ウエルが自分の体調を省みずに働こうとしていたので、無理矢理連れ帰って来ました」

茶髪の少女、シユテルとユーリの会話を聞いていたレヴィは不服そうな顔をしてウエルに詰め寄る。

「ちよつとウエルー？ 僕にあんなこと言つといて自分は無茶しようとしたわけ？」

「そんな事実はございませぬ」

実際、ウエルはまだまだいけると考えていたからの発言だったが、それを聞いてシユテルと話していたユーリは振り向く。

「何言ってるんですか。あそこまで行くときも、ここに戻ってくるときもふらついてましたよ」

めつというようにユーリは指を向けて怒る。ウエルの後ろではレヴィがやーい怒られたーと揶揄って、レヴィも同じですと流れ弾を食らう。そんな彼らの様子にクスリと笑いながら、シユテルはウエルに近づいてくる。

「ウエル。お疲れのところ申し訳ないのですが、あとで少々時間をいただけませんか？」

「ああ、別にいいけど」

何かあったのかと問えば、予想外の答えがやって来た。

「模擬戦です」

「はーっ。」



あの後ウエルがシュテルから詳しい話を聞くと、以前に今現在フ
ローリアン一家で過ごしている二人の少女が事件を起こした世界で
ある地球への渡航許可が出るそうで、再戦の約束をした少女と会う前
に調整をしたいという話だった。他の人との模擬戦は幾度となく繰
り返していたが、ウエルとの模擬戦は数える程度だからちよūdい
機会だからということなのだろう。

「二人とも準備はいいー!?!」

そして今、シュテルとウエルは空中で向かい合っていた。

審判は地上にいる橙色の髪の少女、イリス。シュテルはデバイス
ールシフェリオンを構え、ウエルも逆刃刀状態のヴァリアントザッ
パーを構える。

「じゃ、始め!」

その声が響き、最初に動いたのはシュテルだった。

「パイロシューター」

炎熱属性を持った十二の魔力弾を生み出し、それらが360°。あら
ゆる方向からウエルに襲いかかる。ウエルは所詮、フォーミュラシス
テムを運用しているだけの人間であり、魔導師ではない以上、それら
すべてを対処しきれるほどの演算能力はない。

「アクセラレイター!」

だから、逃げきれなくなる前に脱出する。その言葉とともに一瞬だ
けウエルの全身が発光し、次の瞬間にはシューターの檻を抜け出すだ
けではなくシュテルの背後を取っていた。逆刃刀を振り下ろし、シュ
テルの意識を狩りにいくが、それは二人の間に展開された魔法陣……
プロテクションによって防がれ、ウエルも強引に破ろうとはせずに魔
法陣を蹴って降下する。

「おっと」

「外しましたか」

直後、先ほどまでウエルがいた場所を誘導魔力弾が一つ通り過ぎ
る。その間に魔法陣を蹴つての降下も合わせて、アクセラレイターで

地面すれすれにまで降りながらヴアリアントザツパーを逆刃刀からボウガンに変化させ、模擬戦のために先端を潰した投擲槍ジャベリンにそこらへんの瓦礫を変化させてボウガンの鏃として発射する。

直線状にしか飛ばないそれは、何かしらの隙があるわけでもないシユテルには届くこともなく、華麗に空中を舞うシユテルは一撃ももらうことなく対処を終える。

「ルベライト」

「——！ アクセラレイター！」

そしてそのまま静かな声でバインドが放たれ、遠くにいたせいでその声が届かなかったウエルは未だ魔力というものを感じることができないことも重なり、ワンテンポ行動が遅れた。

結果としてバインドに捕まり、その一瞬後にはアクセラレイターで向上した身体能力により脱出。ボウガン状のヴアリアントザツパーを今一度逆刃刀に戻しながらもアクセラレイターによる負荷を無視して強引にシユテルに向けて跳び立つ。

「ブラストファイアー！」

ルベライトで動きを止めて放たれる予定だったであろう砲撃が、そのタイミングになってようやく放たれる。確かに砲撃は早いがそんな程度の攻撃は躲すことは不可能ではない。まして、アクセラレイターを使っているならなおさらに。ひよいと避けて最初の焼き直しのようにシユテルへ向かっていくと、すでにシユテルは砲撃を止めて迎撃の態勢を整えていた。

「しまっ——！」

「ふふっ、これで終わりです」

左手の籠手、『ブラストクロウ』から放たれる炎を纏った打撃、ヴオルカニックブローを腹に受け吹き飛ばされたところにルベライトで強制的に動きを止められ、そこに先の炎熱砲撃を三連続で相手に放つディザスターヒートが叩き込まれる。

「——っ!!」

まともな戦闘訓練を一切受けていないウエルでは、非殺傷設定の魔法を受ける感覚に慣れず、二度目の砲撃までは腹に叩き込まれた拳の

痛みで無理矢理に意識を繋いでいたが、最後の砲撃でついに意識を刈り取られた。

「私の勝ちですね」

最後の砲撃でついに力尽き地面に落ちていくウエルを拾ってのシユテルの宣言で、模擬戦は終了した。



「何………？」

模擬戦の後、家に帰り昼食をとっていたウエルたちだが、そこで銀の髪の毛の先端に黒のメツシュが入った少女、ディアーチエから話を聞き、ウエルはとある頼みをしていた。

「いや、だからその地球って星に行く時、俺もついていってみたいんだ」

「無理に決まっておろう」

しかし、にべもなく断られる。どうしてといった視線を向ければディアーチエはため息をついて、いいかと前置きをしてから口を開く。

「まず、我らがあちらとこちらを行き来できるのは、我らの事情が事情だからだ。裁判などの関係で幾度か向こうに渡ったこと、フォーミュラの技術体系、そして向こうにいる我らの肉体を形作る際のオリジナル……管理局としても無理に抑え付けるよりもある程度意向を組んだ方がいいと判断している存在が強く望んだことがあって、我らは渡航許可を得ている。それを今から貴様の分を手にするとなればどれだけの時間がかかるか」

「うーん、そこまで無茶でもないんじゃない？」

ディアーチエの説明が続く中、桃色の髪の毛の少女、キリエが口を挟む。それにディアーチエがどういう意味かと視線を向ければキリエは口を開いた。

「だって、ウエルはこの世界の出身ではあってもこの星の出身ではないわけだし。そっちの星の独自の進化を遂げた技術との交流って名目と、なのはちやんたちに『この星に帰ってきてくれた人を紹介したい』って言えばなのはちやんたちも手助けしてくれそうだけど」

それを聞いてぐぬぬと唸るディアーチエだが、少し唸ったあとに嘆息した。

「一応、尋ねてみるが、そこまで期待はするな」

「了解、王様」

これは、少年の新たな一歩。何も知らぬままこの星へと帰ってきた少年が、かつての事件を知り、自らの道を決めるための物語。

地球へ

「結局、成功しちゃったな」

「成功したな」

今、地球……というよりもそこに通じる管理局の施設内部にユーリと元猫三匹、そしてウエルの姿はあった。エルトリアでは見たことない光景を見たことで成功したという実感が湧いて、つい漏らした言葉は、ディアーチェが拾って面白くないというような表情で返事を返した。

「それで、お迎えとやらが来るって聞いたけど」

「まだ来てないみたいですね……」

「まあ、待ち合わせ時間まではもう少しありますし……」

「ねえ、ユーリい、シュテるん、王様あ、僕もう待つ飽きたあ！」

「幾ら何でも早すぎるわー！」

ついでから数分後、早くもレヴィが待つことに飽きて騒ぎ始めたのだが、どうやらここにいるスタッフはあの時の事件に関わった者ばかりのようで、ユーリたちには微笑ましいものを見る目を向け、エルトリアに人が戻ったことも聞いていたのかウエルに視線を向けた後にもう一度四人に目を向けていた。

「あ、王様達もう来てたん？」

それに少々の居心地の悪さを感じていたところに、ディアーチェと髪の色以外は瓜二つの特徴的な喋り方の少女がやって来る。

「はやて、お久しぶりです」

「うん、久しぶりやなユーリ」

その少女、はやてはユーリと会話を始めたが、直後ウエルの姿を認めて話しかけて来た。

「貴方がエルトリアに戻って来たっていう人やな。うちは八神はやて、よろしゅうな」

「俺はウエル・ハーベストって言います。よろしくお願いします」

握手を交わしたところで挨拶は終了。今回は数日の間、地球に滞在している管理局の船に宿泊することになっているが、初日である今日

の時点でシユテルの模擬戦が予定に入っていることはウエルも知っている。だから、模擬戦の会場に向かう道すがらはやてに尋ねることにした。

「そういえば、八神さん」

「うん？ どうしたん？」

「シユテルの相手をする人ってどんな人なんですか？」

名前を聞いても知らない人物のものである以上は特別意味はない。それなら人柄や戦法などを聞いた方がいいだろうと判断してのことだ。

「シユテルの相手をするんは高町なのはちゃん。どういう人かっというとうと明るく優しい子っていうんがあつとるかな。見た目はうちと王様みたいな感じで鏡写しみたいにそっくりなんや」

「そうなんですか……」

「まあ、ウエルくんが会うのは明日以降になるやろうし、その時にでも話をしてみるとええよ」

「はい？ 俺、今日は何かあるんですか？」

「うん、アミタさんたちの例があるから、体組織に地球人との差があるのかどうかを確認してから、フォーミュラに合わせた何か特殊な技術が体内で動いてたりせんかの確認。そんでそのあと、ユーリたちから頼まれとることもあるし」

「あ、私も今回はちよつとやることがあるので皆とはそこまで一緒に過ごせないんです」

「……なかなか面倒なことになってるんですね」

ウエルは本日やることを列挙されて、少々顔を引きつらせながらもそんな返事をした。



シユテル達と別れてからすでに数時間が経過していた。別れ際に

は勝利してきますと不敵な笑みを浮かべていたシュテルだが、実際にどうなったのかは今もなお検査を受けている最中のウエルにはわからず、ただこの検査が終わったら聞きに行こうと思う程度だった。

「はい、それじゃ今日の管理局側からの検査は終了。あとはユーリちゃんから頼まれてることの確認ね」

「ユーリは何を頼んだんですか？」

女性スタッフさんの言葉を受けて、ウエルは先ほどから気になりつつもあとでわかるからとごまかされ続けてきた質問をした。次にその検査をするならもう隠す意味はないだろうと思つてのことで、そして実際、あっさりとスタッフはウエルに答えを教えてくださいました。

「あなたに魔力があるのかどうか。ま、実際にはあるつてわかつてはいたからその魔力ランクの測定ね」

「……………はい？」

ただ、それは少々予想外の答えではあったが。

理解を超えていて呆然とするウエルに、スタッフさんは丁寧にその結果を教えてくださいました。

「魔力量はBね。B+にちょっと届かないレベルかしら」

「いやいや、待つてください！　なんでそんなことを確認する必要があるんですか！」

「うーん、その辺りはユーリちゃんに聞いてみないとわからないけど。でも、貴方を魔導師にしようとしてるのは確かよね。今、あの子はデバイスマスターの資格を取るための勉強をしているみたいだし」

そう、今この場にはユーリはいない。スタッフが言つた通りデバイスマスターの資格を取るための勉強用の図書を借りに行つている。以前からユーリは地球に来るたびにデバイスマスター関係の図書を借りに行つていて、その頃はシュテル達のデバイスが壊れたり機能不全を起こしたりした時に修理をするためかと思つていたが、それ以外の目的もあるようだ。

「まあ、貴方のために用意してくれるらしいから、もらつておけばいいんじゃない？　あつたらあつたで便利なことには間違い無いんだから」



その日の夜、ウエルは一人で割り当てられた部屋にいた。

当然のことながら、ウエルは男で残りの四人は女。だから部屋が別になるのは当たり前前で、今のウエルにとってはありがたいことだった。

ちなみにシュテルとなのはの模擬戦の結果はウエルは知らない。今日の疲れもあって、それを聞くことも忘れて部屋に戻っていたのだ。

(それにしても、なんでユーリは俺を魔導師にしようとしてるんだろ
う?)

ウエルが今考えていることはただそれだけ。気になるなら聴きに行けばいいと言われるかもしれないが、いくら家族のような関係だからと言って、女性の部屋に行けるほど凶太くはなかった。なので悶々としながら考えていると、部屋にノックの音が響く。

「? どうぞ」

ウエルが言葉を発すると、扉が開きそこからユーリが入ってくる。その髪の毛が微妙に湿っていて、風呂上がりだと気がつきウエルはギョツとした。

「ウエル、今いいですか?」

「あ、うん、別にいいけど……」

しかしテンパっていても、言葉を発する前にユーリから許可を求められて、よくわからないまま許可を出してしまう。するとユーリはウエルが腰掛けているベッド、それもウエルの真横に座り、距離を取ろうとしても詰めてくるのでウエルも諦めて、そのまま超至近距離で話をすることにした。

(なんかいい匂いするんだけど……!?)

(うう……恥ずかしいですけど、シュテルが男の子には効果抜群だっ

て言っていましたし)

二人とも、頭の中では違うことを考えていたが、それでも話ができないわけではない。なので、ほんの数秒ほどの沈黙を破り、会話が開始された。

「あの、ちよつと聞きたいことがあつて……」

口火を切ったのはユーリ。もともと話をしたくてここにきたこともあつて、話す内容も決まっている彼女が先に口を開くのはある意味当然と言えた。

「うん、なに?」

「今、ウエルのデバイスを作ってる最中なんですけど、どんな感じの武器がいいのかわからなくて。ウエルが使うなら、ウエルの意見を反映させた方がいいと思つて聞きにきたんです」

「デバイス、確か魔導師の使う魔法の杖みたいなもの、なんだよな?」
「はい」

ウエルにはそんなものを使っている自分を想定できなかつた。基本フォーミュラシステムでどうにかしてきたし、これからもそうしていくつもりだったから降つて湧いた『魔法を手にする機会』というものに頭がついていけない。

「手に持ちたくはないなあ。フォーミュラ使つて戦うわけだし。ヴァリアントシステムを扱えないように手が塞がれるのはごめんかな」
「なるほど……」

ただ、それでも聞かれた質問には答え、ユーリはウエルの言葉を聞いてメモを取る。そのメモを取り終わるのを待つてウエルも質問をする。

「ところで、なんでユーリは俺を魔導師にしよう?」

「別に魔導師にするつもりはないですよ? 合う、合わないもあるでしょうし、ウエルが嫌ならそれに関してはどうも思いません」

「なら……」

「でも、もしもの時に取れる手段を増やしておくのはいいことだと思いますし、そうでなくても普段から無茶をすればかりのウエルにはお

目付役がいると思うんです」

至近距離から琥珀の目を向けてくるユーリ。そこには真面目な話をしていくからか先ほどまでの照れの色はない。

「シユテル達は、元は猫なのに人間としての姿の元になったのはたちの影響か戦うことに支障はないです。アマタ達も戦闘経験は多いから多少力の差がある程度の相手には負けません。でも、ウエルにはそのどちらもないから、手段だけは増やしておきたいって思ったんです」

「ああ……」

ユーリの瞳に魅入られて、その言葉は耳から入っては抜けていく。けれどウエルは、それでもどうにかして返事だけは返して、そこで会話が途切れた。

「そ、そうです！ もう一つ話が、というよりもお願いがあるんです」
そして、今度の沈黙には耐えきれずに、ユーリはウエルに話しかける。

「お、おう……」

ウエルはタジタジになりながらもユーリの言葉を待ち

「今日、ここに泊めて欲しいんです！」

「……は？」

その言葉を聞いて目が点になった。



——どうしてこうなった！

今のウエルの心情を言葉にするなら、こういうところだろうか。

「ウエル、あったかいです」

壁と密着したベッドの上で、扉の方に寝ることでユーリが落ちないようにしながら、ウエルは自分の中の獣と戦っていた。背中を向けているので今のユーリの表情はウエルにはわからないが、二人揃って茹

で蝟のように赤くなっている。

(「ディアーチエたちが教えてくれた方法でやってるのに、全く反応してくれません……」)

(「ここで反応したらディアーチエに殺される……」)

どうでもいいことだが、ウエルはユーリに好意を抱いているし、ユーリもウエルに好意を抱いている。だが二人は恋人というわけではない。理由はいくつかあるが、その一番大きなものはディアーチエだろう。

——もしも貴様がこの家の者に手を出したなら、その時は我が一片の塵も残さずに殺し尽くしてくれる。

出会った当初、エルトリアに人が戻って来たことを喜んでいたフロリアン一家の中で、唯一冷静だったディアーチエがウエルに対して言った言葉である。信頼も何もない状態なので何もおかしな言葉ではないが、その言葉が未だに残っているためにウエルから手を出すことはない。ちなみに今のディアーチエはもう信頼しているので特にそんなつもりはないが、そんなことを長年の付き合いでもないウエルにはわかるわけがない。

なので端から見たら付き合ってるように見えても付き合っていない。

(「ディアーチエ一体何考えてんだ!」)

(「ディアーチエがせっかく『明日の朝には良い報告を期待している』なんて言って送り出してくれたのに……」)

念話を使っているわけでもないのに、ユーリの思いが届くことはないが、まさかのウエルの疑問にユーリが答えているという状況である。

二人は無駄に意識している影響で眠れないかと思われたが、慣れたエルトリアとは全く違う土地であることや、ウエルは大量の検査による疲労、ユーリは多くの勉強をしていたことによる疲労が溜まっていたこともあり、二人してしばらく時間が経った頃には微睡みに落ちていたのだった。

デバイスと魔導師と

ユーリが受けるデバイスマイスターとしての資格試験も近くにあるので、その合否が発覚するまでの間は地球に留まることになっている五人。彼らがエルトリアを離れてから二日目、その日は地球で過ごすことになっていた。

「初めまして、高町なのはです」

「初めまして、ウエル・ハーベストです」

がっしりと握手する二人。茶髪の少女なのはとウエルは「初めまして」なので、挨拶を最初に行うことになった。

「八神から聞いてるかわからないけど、俺と高町さんは同じ年らしいし、敬語は別にいいよ」

「うん、ありがとう」

朝はディアーチエ達から『昨晚は何かあったのか』と問い詰められて『何も起こさなかった』と返せば理不尽に怒られたことでウエルは少々疲れていたが、なのはの笑顔で癒されていた。その後ろでユーリは少し面白くなさそうな顔をしているが、好きではあっても想いを伝えたくてではなく、付き合っているわけでもないユーリに何か言うことなどできるはずもなく、ただ面白くなさそうな表情をするに止まるのだった。

（あれって、ユーリちゃん。多分ウエル君のこと好きなパターンだよね……）

的確に状況を判断するなのは、今どこまで二人の関係が進んでいるのかわからない上、特に恋愛経験があるわけでもないのので何をすればいいのかわからない。

（それにしてもシユテルにそっくり……ああ、いや違うか。高町さん“が”そっくりなんじゃなくて、シユテルがそっくりなのか）

そしてそんなことを考えているなど知らないウエルは、先のはやてと会った時にも感じていた、知り合いとそっくりなことへの驚きを今回も覚えていた。

「それで、今日はどうするの？ 海鳴を案内してほしいって話だけど、

どこか行ってみたってところある?」

「うむ。我らは海鳴は初めてではないが、此奴だけは初めてだからな。まずはウエルの行きたいところ、と言うことで話がついておる」

「そうなの? なら、ウエル君の行きたいところにするけど……」

リクエストは、と尋ねるなのはにウエルは一度領いて行きたい場所を告げる。

「かつてここで起きた事件で、ユーリ達が関わった場所に行ってみたい」



ウエルの言葉から始まった海鳴巡りも、そこまで数が多くないと言うことに比例して、多くの時間を取られることなく順調に昼前には終わりを告げていた。

「もぐもぐ、あー、おいしー!」

「ほら、レヴィ。溢してますよ。……それにしても美味しいですね」

「うむ、あとでレシピを聞かせてもらいたいところだな」

そのため、今は昼食をとるためになのはの実家、喫茶『翠屋』にやってきていた。

「本当に美味しいですね、ウエル」

「ああ、高町さんの家つてすごいんだな……」

少々呆然とするウエルの視線が向けられているのは、なのはの兄と父親。戦闘を生業とするわけではないウエルだが、彼らの強さとか異常性は地味に感じていた。戦ったら五秒も保たないだろうと確信を持って言える程度には強いのだろうと思っていた。空から一方的に撃つていても倒しきれれるとは思えていなかった。

「もう、ウエル。何考えてるのかわかりませんが、せっかくのご飯なんです。ちゃんと味わって食べましょう?」

私、怒ってますと言うような表情のユーリにごめんごめんと謝り、

ウエルも食事に集中する。その光景を見てなのはは元三匹の猫ディアーチエ達に小声で問いかけた。

「ねえ、三人とも。あの二人って付き合ってるの?」

「いや、我らの知る限りではあの二人は付き合っておらんはずだ」

「ユーリはウエルのことが好きなのよ、その手伝いはしていませんが」

「ウエルもユーリのこと好きだと思っただけだなあ……」

だが、結局のところ外野でしかない四人には何もしようがない。せいぜい、告白する勇気をこつそりとあげる程度だが、そもそも告白しようとしていない二人では勇気があっても意味がない。

「ほら、ウエル。あーん」

「え、ちよ、ユーリ!?!」

二人とも顔を真っ赤にしながらも食べさせあいをしている光景を見て、本当に応援する必要があるのか疑問に思ったりしたが。

(ちよつと、誰か助けて!?)

横目で見えてきたことで大体の言いたいことを察したのがそこに割り込んでいったりもした。



そうして過ぎていく時間。

日が進み試験当日、ユーリが試験を受けている間に何もしていないのは落ち着かないからとシュテルやレヴィがオリジナルとなる人物と対戦したり、ディアーチエがはやと共に無限書庫に行っている間、ウエルは一人、貸し出されたデバイスと共に、魔法を使う感覚に慣れることと、魔法適性を確かめることの二つを同時に行っていた。

『次、魔力弾』

「シューター」

その言葉に持っていた杖が反応し、シュテルが使っているものとは

色も数も違うが、同じ形式の魔法が発動した。シユテルは一瞬で十二個展開していたが、ウエルは六個。適性があるのかないのか、微妙に判断に困るところであった。

『次、収束砲撃』

「バスター」

スタッフの言葉に従い、現れた的に対して砲撃を放つ。ウエルの知る魔導師はシユテル、レヴィ、ディアーチェ、ユーリの四名だけ。つまり基準はその四人なのだ。だから、ウエルはそこまで自分の才能には期待していなかった。

『うん、そこまで。一旦戻ってきて』

「はい、わかりました」

そうしてウエルが戻ると、おそらくは検査結果が書かれているらしき紙を持ったスタッフがそこにいた。

「貴方の適性は――」

「それでそれで！ どうだったの？」

「俺の適性？ 俺にできるのは攻撃だけらしい。プロテクションとかバインドとか加速とか、そういうのには適性が全くないって言われたよ」

レヴィが身を乗り出して聞いてきたのでウエルは答えたのだが、試験を終えて戻ってきてそれを聞いたユーリは、何か考え込むようにしていたのだった。

「攻撃しかできないなら、それ以外をデバイスの方でフォローして――」

「ユーリ？」

しかし、その言葉に対する返事はなかった。



「あれが魔導師同士の戦いってやつかー」

さらに翌日、前日の模擬戦はシュテルの敗北で終わったらしく、その再戦に燃えたシュテルによってなのはに仕事が入っていない翌日にも模擬戦が入ることになった。結果として、これまでは予定が合わなかったせいで一度たりとも見る事ができなかったウエルが、ついに模擬戦を見ることができていた。

モニターの先、模擬戦のフィールドではなのはの桃色のシューターとシュテルの緋色のシューターが駆け巡り、それらをひらりと躲し、時にはプロテクションで防ぎながら、二人は空を舞う。

戦闘スタイルはシュテルがなのはを基にしていることもあり、二人はとても似通っている。だが、シュテルにはなのはにはない近接用の武装もついでいて、そちらの習熟に割いた時間もある。その間もなのはは砲撃を極めていたことを考えれば、総合力で差があるとは考えづらい。

「さすがにあんなに派手な戦いはなかなかないですけどね。……今の所は、事件の時の戦いも含めて三戦中、なのはが二回勝ってるらしいですから、今日勝って勝率をイーブンに戻すつもりなんじゃないでしょうか?」

「……勝率がどうこうっていうよりも単純に負けたくないから勝つって感じがするけど」

ウエルの横に座る髪の色以外はレヴィと瓜二つな少女、フェイトの言葉にそう返しながらも画面から視線は逸らさない。

シュテルとなのはがブラストファイアーとデイバインバスターをぶつけ合い、残留魔力が高まっていく。爆発により視界が遮られたタミングでシュテルが接近しブラストクロウで殴打する。吹き飛んだなのはをルベライトで拘束し、その隙にシュテルは残留魔力を収束していく。

「疾れ、緋星。全てを焼き消す炎と変われ」

シュテルのバインドの強固さはウエルも知っているが、なのははウエルよりも早くバインドを解除してシュテルと同じように魔力を収束していく。

「真・ルシフェリオン——」

「スターライト——」

完成タイミングはわずかにシュテルの方が先。けれど発射がわずかに遅れた程度で、チャージ時間そのものには差はない。

「ブレイカー!!」

二つのブレイカーによって、先ほどの砲撃のぶつかりあいをはるかに超える魔力が撒き散らされた。威力は互角。故にそれらが決め手となることはなく、けれどシュテルが少し早くチャージしていたことでぶつかり合った地点は、シュテルとなのはの間、わずかになのは側。煙に巻き込まれたなのははシュテルが動いたとしても位置を把握することは不可能で、シュテルはその隙にさらに魔力をチャージする。

「ディザスターヒート！」

三連撃で打ち込まれるブラストファイアーは、数日前の模擬戦のものよりもはるかに大きい。煙の中のどこに隠れていようと煙ごと吹き飛ばしてしまえば関係ないと言わんばかりに突き進む緋色の砲撃が終わった後には、気絶したなのはが落ちていった。

「勝ちました」

ピースサインをカメラに向けて、無表情ながらもどこか満足したような表情のシュテルがそんな言葉を吐いた直後、模擬戦の終わりを告げる音が仮想戦闘空間に鳴り響いた。

「うー、悔しいなあ。ねえ、シュテル。明日も模擬戦しよう？」

「ええ、今度は私が勝ち越させてもらいます」

(この二人、実は戦闘狂なのでは……?)

戻ってきた二人がそんな会話をしているのを聞き、ウエルはひとりごちる。しかし誰もそのことにはツツコミを入れないため、これが魔導師の普通かと勘違いしてそのまま話を進めることにした。

「それで、次はテスタロッサさんとレヴィだよな？」

「あ、うん。それじゃ行こっか、レヴィ」

「まけないぞー！」

「私だって！」

(高町さんもテスタロッサさんもそうだし、シユテル達もそうだけど、もしかして魔導師になると皆戦闘狂になるんだろうか?)

戦意を昂らせながら戦闘用のシミュレーターに向かう二人を見送って、一人ウエルは考えるのだった。



「だいたいこんな感じでしょうか？」

フェイトとレヴィの模擬戦がフェイトが一瞬の間について勝利した日の夜。誰もが疲れから眠っている中、ユーリは一人部屋の中でホロウインドウを展開して考え事をしていた。

ホロウインドウに映っているのはデバイスの設計図。ユーリが今から作る、たった一人の少年のためだけのデバイスが、そこには映っていた。

「まあ、まだ作ることはできないんですけどね」

そう、未だにデバイスマイスターの試験の結果が出ていない以上は、ユーリには設計図を書くことや案を出すことはできても作ることはできない。少年の戦い方に合わせたデバイスを作るために彼の戦い方をよく知るユーリが最低限の構想だけを作り、設計などはベテランのデバイスマイスターに任せることもできないわけではなかったが、これだけは譲れないとユーリは頑として任せることはなかった。「早く作りたいです」

設計のチェックをしながらもつい漏れてしまったその言葉を聞く者はいなかった。

魔導師

ユーリが受けたデバイスマスターの試験、その合否通知が来る日。その日、エルトリアの面々はどうしようもなくそわそわしていた。

「緊張します……」

「なんでまだ来ないのー！」

「落ち着かんかレヴィ」

「そんなこと言っているディアアーチェもそわそわしていますよ」

「シユテルもそわそわしてるけど……」

五人揃ってそわそわしながら、女子の部屋に入るのもということ、なぜか共同スペースではなくウエルの部屋で待っていた。

「あ、来ました！」

十分ほど経った頃、ユーリの持つ、こちらにいる間連絡を取るために支給された携帯端末の元にメールが届く。ユーリがそれに声をあげて、緊張しますなんて言いながらメールを開いた。そこに書かれているユーリの名前などは流して、合否の部分にのみ全員の意識が集中する。

「結果はどうなの？」

「ちよつと待ってくださいね……えつと」

レヴィに急かされるようにして合否が書かれた場所までウインドウをスクロールしていく様を全員が緊張しながら見ている。そうして一番下までスクロールし終えたところに、合格の二文字が発見された。

「よかったです……」

「ユーリ、合格したんだ！」

「ふむ、今日は祝いだな」

「ええ、ユーリの合格祝いです」

三人寄れば姦しいとまで言われる女子が四人で会話する中に、この部屋にいる唯一の男子たるウエルは加わらずに、その様子を少し離れて見ていた。別に大した理由があるわけではなく、ユーリと近づき

ぎてディアーチェに怒られた経験があるからである。

「これでウエルにデバイスを作つてあげられます！ 最高のデバイスを作りますからね！」

「その辺りは心配してないよ。ユーリの腕は知らないけど、真面目なことは知ってるから」

ちゃんとしたものを完成させないと渡すことはしないだろうとウエルは確信していた。その信頼を受けてユーリは恥ずかしくなるが、それと同時に信頼に応えたいと奮起もしていた。



数日後、訓練室にウエルの姿はあった。

『それじゃ二人とも、お願いします』

「ええ、任せてくださいユーリ。彼の魔導師としての戦闘の初めての相手はしっかりと勤め上げてみせます」

ウエルの眼前には、この世界に来る前の模擬戦の時のようにシユテルが浮かんでいる。

今回も行うことは模擬戦に変わりないが、以前のそれとは違い今回はウエルも魔導師として戦うことになる。

本来ならフォーミュラに魔導を組み合わせる形で使うことになるのだが、まずはデバイスとしてまともに運用することができるかどうかの確認になる。それが終われば次はフォーミュラ……:というかわアリアントアームズと組み合わせるといふことになり、難易度はおそらく急激に高まる。

「どう考えても負ける気しかない……」

「デバイスがしっかりと動くかどうかを確かめるのが目的ですから、勝ち負けは気にしなくてもいいでしょう。……まあ、負けるつもりはないですが」

が、それもまずはデバイスがちゃんと動くことが確認できなければ

実行することなど不可能。

その確認のためにも、どうぞ、と促すシュテルに従い、ウエルは普段つけていない、手の甲に宝玉のついた手袋に向けて呼びかける。

「ガーディアン、セットアップ」

その言葉とともに私服からウエルが最も戦いに適していると考えられる格好、彼が普段から使用するフォーミュラスーツがそのままバリアジャケットとして生成された。

「お、おおお？」

さらに、バリアジャケットを纏ったウエルの周囲にユーリが使う武装、魄翼によく似た武装が四つ浮かんでいる。さらにそれにヴァリアントアームズを合わせて戦うのが基本となるが、今はまだ魄翼に似たユニット、“リユストウング”の扱いに慣れることから始めないといけない。

「えっと、こんな感じ、か？」

ふよふよと浮かぶりユストウングを左右に動かしてみても通常の操作に難がないことを確認し終えたところで、ユーリから声がかかる。

『準備はいいですね』

「はい、もちろんですよユーリ」

「こつちもなんとか」

『では、試合——』

シュテルはルシフェリオンを両手で持ち、先端をウエルに向けて構える。

ウエルはリユストウングを左右の斜め前方に二つずつ移動させて前傾姿勢になる。

『——開始——』

「先手必勝！」

シュテルはボックスステップしながら空へ飛び上がり、ルシフェリオンを突き出すようにしながら魔力弾バイロシューターをその先端に十二生み出す。

それらが様々な方向から己に向かってくるのを確認して、ウエルはリユストウングにガーディアンを通じて命令を送り、四つある魄翼のうち最も外側の二つが羽を開くようにして変形したことを視界の端

に捉えた。

(なるほど。防御魔法が使えないぶん、これが盾の代わりにもなるってことか)

リユストウングに流し込んだ魔力が変形した外側の二つに集中し、その二つを起点として魔力の壁のようなものを生み出す。感覚的にはパイロシューターなら三十程度は余裕で受け切れるだろうが、収束砲撃クラスだと一瞬で割られると判断して、砲撃が飛んでくるよりも先に距離を詰めることにした。

フォーミュラシステムが起動して、飛行魔法を使えないウエルが空中でも戦えるようにしてくれる。空に向けて踏み込むために一度魔力壁は解いて、リユストウングを物理攻撃用の武器へと戻す。本当ならフォーミュラはデバイスの確認の後なのだが、そもそもフォーミュラを使用しないことにはウエルに勝ち目はないのでヴァリアントアームズのみ使用を禁じられている。

「せいっー!」

腕の動きと連動して魄翼が動く。シユテルに向けて襲いかかる翼はプロテクションにて防がれ、そのままプロテクションの内側からリユストウングをシユテルがブラストクロウにて殴ったことで、一度打ち落とされた。

「ブラストファイアー!」

シユテルから放たれる炎熱砲撃を見るよりも先に、叩き落とされたリユストウングへ干渉し己の元へと戻したウエルは、それらを重ねて砲撃を防ぐ。

「アクセラレイターツ!」

リユストウングが押し切られそうなことを確認して呪言を紡ぐ。その文言が紡がれるとともに、体内のナノマシンが励起し髪が発光する。そしてウエルが砲撃の射線状から逃れようとした瞬間、異変に気がついた。

「あれ? アクセラレイターってあんなに遅かったっけ?」

そしてその異変は、観客席で見ていた面々の中ではアクセラレイターを使用したことのあるのが最初に気がついた。その疑問が言葉として外界に出ると、他のアクセラレイターを見たことある面々も気がついて、答えを知っているであろうエルトリアの面々を見る。

だが、エルトリアの面々も一人を除いては訝しげな顔をしている。故に、その中で唯一平然としているユーリに皆が顔を向けるのは当然といえた。

「ガーディアンには、ウエルの無茶を防ぐためのお目付役としての役割もありますから。基本的に体に負担のかかる技は使わせません。アクセラレイターは、ナノマシンを最大稼働させるせいで体に負担がかかりますから、負担がかからないギリギリのラインまでしか加速できないうようになってます」

「それは……」

むしろ全力を出さないと勝てない相手の場合は危険なのではないかと、今この場にいる面々の意見は一致していた。そのことも理解しているのか、ユーリは言葉を続ける。

「もちろん、彼が無茶をしないと勝てないと思つた場合には自分の意思でその制限を解除することは可能です。私が止めたいのは、しなくてもいい無茶だけですから」

全力のアクセラレイターよりも遅くとも、リュストウングが抜かれるよりも先に脱出することは可能であり、ウエルは抜け出た直後にリュストウングを回収してその速度を維持したままシユテルに特攻する。

「バスター」

ブラストファイアーを放つことをやめて迎撃に入ろうとするシユテルにほとんど威力のない砲撃を放つことで一瞬だけ時間を作る。

「貫けー」

普段のアクセラレイターならその時間だけで距離を詰めることに成功していたのだろうが、今の速度ではどうしても一手足りない。故

にその一手分の時間を作るために変形したりリュストウングに魔力刃を展開しそれを飛ばす。

「遅いっ！ デイザスターヒートツ！」

しかし、その魔力刃が届く頃にはシュテルはすでにチャージを終えて三連撃の砲撃を放つ。連撃にするために一発あたりの威力は低くなっているが、それでもウエルにとって脅威であることには代わりない。

一発目。魔力刃を消しとばし、向かっていたリュストウングを撃ち落とす。

二発目。防御に回された残りのリュストウングに阻まれる。

三発目。リュストウングを抜いて、防ぎきれると踏んでいたウエルに直撃。

「しまっ！」

動きの止まったタイミングでシュテルの必勝コンボの始まり、ルベライトでの拘束が決まってしまう。

「真・ルシフェリオン——」

(あ、これ負けだな)

「——ブレイカーツ!!」

迫り来る砲撃を受け入れるようにして、ウエルは目を閉じるのだった。



「あつ、目が覚めましたか？」

「ユー、リ？」

目を覚ましたウエルが最初に見たのは、なぜか自分を見下ろすようにしているユーリの姿だった。

「シュテルのブレイカーで気絶しちゃったんですよ」

覚えてないですかと心配そうにするユーリだが、そこでようやく今

の体勢に気がついたウエルとしてはそちらにまで気が回らない。

(え、これってまさか膝枕!?)

「どうかしたんですか?」

しかし、ユーリは調子がおかしいことには気がついて、その理由にまでは思い至らない。結果として、さらにウエルをドギマギさせていることなど知らないままだった。

「ユーリの羞恥の基準はどこにあるのだ……」

「膝枕はセーフで、抱きついたりするのはアウトで、お風呂上がり部屋に行くのはセーフって、状況だもんねー」

そしてそれを、少し離れたところでディアーチェたちは確認していた。今はユーリによってウエルにリミッターのことが教えられていた。

「全く、あの二人の関係性はいつになったら進むことやら……」

「色々やってるのにねー」

「まあ、二人には二人の進め方があるのでしよう」

「そうはいつでも、ああまで全く進まんと心配になってくるぞ」

意識しているウエルと、そのことに気がついていないユーリ。二人の様子を見てディアーチェはため息をつくのだった。